

太宰治 『パンドラの匣』 論

— 〈かるみ〉と民衆の詩人—

河田 和子

一 はじめに

太宰治『パンドラの匣』（河北新報「昭二〇・一〇・二二—二一・一・七」）は、太宰フアンの木村庄助の日誌をもとに書かれた長編小説である。元々昭和一八年の秋に『雲雀の声』として書き下ろされていたが、出版間際空襲を受けて原稿が焼失した為、校正刷をもとに戦後書き直し、『パンドラの匣』と改題した。太宰にとって戦後第一作目の初の新聞連載で、昭和二二年六月に河北新報社から初刊本が出版された¹⁾。

この小説は、結核療養所「健康道場」で療養中の青年ひばり（本名・小柴利助）が親友に宛てた手紙の形式を取っている。彼は終戦の日、玉音放送を契機に「新しい男」に生まれ変わろうとし、入院患者は「塾生」、「看護婦」は「助手」と呼ばれる「健康道場」での生活を

親友に書き送る。小説のタイトル自体ギリシヤ神話に由来するものであり、「不幸のどん底につき落され」ても「一縷の希望の糸を手さぐりで捜し当て」ようとする人間の再生の物語が記されている。

敗戦直後にしては向日的で明るい小説だが、それはひばりが求める〈かるみ〉の心境と関係する。しかし、その〈かるみ〉については、「天皇という超越的存在を媒介とする自己放棄・判断停止によってもたらされたもの」という見方（東郷克美「太宰治のキーワード」かるみ・ユートピア」、「国文学」平三・四）や、「作品の底の浅さに直結している」（堀越和夫『パンドラの匣』、東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』双文社出版、昭五・一九）という批判的見方もあり、小説後半では戦後の社会的風潮に対する思想的発言、便乗思想批判もなされることが「一種奇妙な印象をもたらす」

し（饗庭孝男「パンドラの匣」、『太宰治論』講談社、昭五一・二二）、〈かるみ〉のモチーフにそぐわないという指摘もある。

こうした評価の論点は、ひばりの希求する〈かるみ〉がどういふものか、それは越後獅子⇨詩人・大月花宵（本名・大月松右衛門）とどう関わるのかという問題と繋がっている。越後獅子が詩人「花宵先生」だと判明した後、ひばりは自分達の為に「軽くて清潔な詩」を書いて欲しいと切望する。そうした詩は〈かるみ〉の心境と繋がるものだが、なぜ花宵にそうした詩を求めたのか。そもそも、「オルレアン少女」の作者、大月花宵はどういう詩人なのか。管見では、従来、越後獅子の思想的発言の方がもっぱら問題にされ、彼がどのような人物、詩人であったのかについて考察されること有余りないようだが、花宵としての詩人の側面に着目するならば、ひばりの〈かるみ〉と越後獅子の思想的発言の接点も見えてくるのではないか。そこで本稿では、大月花宵が「オルレアンの少女」の作者として設定されていることの意味を考え、彼がどのような詩人なのかを見ていくことで、ひばりの希求する〈かるみ〉と

の接点を検証したい。

二 シンフリーの影響と民衆の詩人

まず、大月花宵がどういふ詩人なのか、彼の傑作が「オルレアンの少女」とされていることの意味から考えたい。越後獅子が「花宵先生」であることが判明するのは、詩人であるひばりの友人が健康道場を訪問した時だが、慰安放送で助手達は「オルレアンの少女」を二部合唱する（この時点では、彼女らはその作者、花宵が越後獅子と同一人物であることを知らない）。「オルレアンの少女」の歌詞は小説中に出てこず、どんな内容のものか不明だが、タイトルからして独逸の戯曲詩人フリードリヒ・フォン・シラー（シルレルとも表記）の『オルレアンの少女』（Die Jungfrau von Orléans 一八〇一年）を意識したものでだろう。この戯曲は、ジャンヌ・ダルクの伝説を題材にした韻文五幕の戯曲で、聖母マリアのお告げを受けて祖国救済に向かった少女が、劣勢の軍を指揮し敵軍を見事に撃破するものの、イギリスの敵將に恋心を抱いてしまい、神託による祖国救済

「天からの使命と禁断の恋との間で板挟みとなり苦悩する物語である。当時出版されていた日本語訳のタイトルは『オルレ안의少女』(藤沢古雪訳、富山房、明三六・二二)／富山房百科文庫、昭一三・三七)や『オルレ안의乙女』(佐藤通次訳、岩波文庫、昭一三・二一)、『オルレ안의処女』(新関良三編・関泰祐訳『シラー選集』第五巻に収録、富山房、昭一九・六)となっている。タイトルだけ見れば、太宰が藤沢の訳本を参照した可能性は強いが、出版時期は後の翻訳の方が近いので、ここでは特定しないでおく。ちなみに、昭和一八年五月一八日から二四日まで、東宝演劇研究会による「オルレ안의処女」の公演が東京の帝国劇場で開催されたが^三、それは関泰祐訳の『シラー選集』に拠る。

太宰の小説には、「ダス・ゲマイネ」(『文芸春秋』昭一〇・二〇)^四や「走れメロス」(『新潮』昭一五・五)など、シラーの影響が見られるものがあり、「もの思ふ葦(一)ダス・ゲマイネに就いて」(『日本浪漫派』昭一〇・二二)でも、「シルレルはその作品に於いて、人の性よりしてダス・ゲマイネ(卑俗)を駆逐し、ウール・シユタンド(本然の状態)に帰らせた。そこにこそ、まことの自由が

生れた」と書いている^五。花宵のモデルは太宰ではないが、後述するように、シラーの戯曲が『パンドラの匣』の構想にヒントを与えたと思われる所もあり、この架空の詩人もシラーの戯曲に感化を受けた形で「オルレ안의少女」の詩(歌詞)を創作したと見てよからう。

シラーの戯曲では、羊飼いの娘・ジャンヌが、シャルル七世の元へ駆けつけ、果敢な闘いによってオルレ안의危機を救い、「自由を仏蘭西に返へし与へし功」(藤沢古雪訳『オルレ안의少女』前出)が讃えられるが、それは或る夜に聖母マリアのお告げ「天の啓示を受けたことが発端となっている。しかも、シラーの戯曲では、「正史上のジャンヌがおのれの身を焼く薪の光を天国への道をてらす松明として、敵人の嘲罵のうち、救世主のまぼろしを唯一の慰藉としながら死んでゆくのに対し、(略)みづからとも国人とも和した乙女の魂が、身方の哀惜のうちに静かに薔薇色の雲のたなびく『よろこびの天国』に上昇する結末」(佐藤通次訳『オルレ안의乙女』前出、訳者「まへがき」)になっている。キリスト教的な天の啓示「(聖霊)により、自由の勝利をフランスにもたらしながら、闘いで負傷し死んで

いくジャンヌの魂は、最後に天上へ召される形で虚構されている。つまり、フランス国王のため命を賭けて戦い、祖国に勝利をもたらした一少女の行動は、キリストの神々天の意志によるものとして、彼女の魂も最後に救済される物語になっている。

想起したいのは、『パンドラの匣』の最初で、昭和二〇年八月一五日正午、ひばりはラジオから流れる「天来の御声」を聞き、「聖霊が胸に忍び込」んだことで、「余計者」意識に囚われていたこれまでの自分とは「ちがふ男」になったと述べていることである。敗戦の日の「天来の御声」は天皇の詔勅を聞いて泣いた時、「不思議な光」が体に射し込み、その神秘的体験から価値観も変わったと言うのだが、「聖霊」自体、キリスト教的な言辞である。天皇とキリスト教を結び付け、天の啓示を受けたかのような表現は、シラーの戯曲で、ジャンヌが聖母マリアの啓示（聖霊）を受け、羊飼いの娘としての生活を捨て、フランス国王の危急を救うのと発想的に近似する。さらに、越後獅子が自由思想について「キリストの精神を知らなくては、半分も理解できない」と語り、「便乗思想」批判をした後、「天

皇陛下万歳！」の叫びに今日の「最も新しい自由思想」があると説く所など自由とキリスト教、天皇の三つを繋げているが、それはシラーの戯曲において、フランスに自由の勝利をもたらしたジャンヌの国王への忠誠が、キリスト教の信仰に基づいていたことと通底する。

このように、『パンドラの匣』の構造から見てシラーの影響がうかがえ、天皇とキリスト教を自由思想で結びつける越後獅子の発想もシラーの戯曲に由来する。が、注意したいのは、花宵の傑作「オルレアンの少女」は、少年雑誌に挿絵入りで紹介され、健康道場の助手達によって二部合唱されたりするように、一般の人々に親しまれ、歌われる詩だったことである。つまり、シラーの詩が「ダス・ゲマイネ」、俗を排するのに対し、花宵の詩は、唱歌や童謡のように一般の人々、大衆に愛好されたものだった。彼の「天皇陛下万歳」発言も、鈴木貞美の指摘するように「大汎に人びとの間にあった心性を掴んだうえで書かれたもの」（『人間の零度』もしくは表現の脱近代）河出書房新社、昭六二・四、「寓意の爆弾——敗戦小説を読む」と見るなら、「オルレアンの少女」が「大はやりのもの」だったのも、一般

民衆の心性を表わし、彼等の感覺に響く所があったからだろう。即ち、民衆の心性を表象する花宵の傑作が「オルレアン少女」であり、花宵は越後獅子であることを知った健康道場の人々が「無条件」に彼を尊敬するのも、民衆の感覺、心情を表わすことに長けた（民衆詩人）だったからだ。

三 高悟帰俗の（かるみ）

そこで、「ひばり」が希求する「かるみ」についても考えたい。花宵こと越後獅子が「また、詩を書くかな」と言った時、ひばりは「先生の詩のやうに軽くて清潔な詩を、いま、僕たちが一ばん読みたいんです。」「軽快で、さうして気高く澄んでゐる芸術を僕たちは、いま、求めてゐるんです。」と切望する。「僕たち」と複数形になつてゐることからも、ひばり個人の要望ではなく、彼の友人や道場の人々も含む広汎な読者の声として、花宵の詩が渴望されている。この「軽快」で「気高く澄んだ芸術の境地を「かるみ」として、ひばりは友人に向けて、こう書いている。

それは羽衣のやうに軽くて、しかも白砂の上を浅くさらさら走り流れる小川のやうに清冽なものだ。芭蕉がその晩年に「かるみ」といふものを称へて、それを「わび」「さび」「しおり」などのはるか上位に置いたとか、（略）芭蕉ほどの名人がその晩年に於いてやつと予感し、憧憬したその最上位の心境に僕たちが、いつのまにやら自然に到達してゐるとは、誇らじと欲するも能はずといふところだ。この「かるみ」は、断じて軽薄と違ふのである。（略）くるしく努力して汗を出し切つた後に来る一陣のそよ風だ。世界の混沌の末の窮迫の空気から生れ出た、翼のすきとほるほどの身軽な鳥だ。

「翼のすきとほるほどの身軽な鳥」は「健康道場に於ける一羽の雲雀」と重なるイメージであり、（かるみ）はひばり自身の生き方に直結している。その（かるみ）の詩境が花宵の詩として切望されているのだが、芭蕉に由来する（かるみ）の概念自体、国文学者・頼原退蔵の芭蕉論の影響を受けて書かれたものと見られる^六。

頼原の「不易流行と軽み」（『俳句研究』昭一五・四、『芭蕉・去来』創元社、昭一六・三）によれば、『別座

鋪」(芭蕉の門人・子珊の編纂)の序文に「浅き砂川を見るごとく」とあるのが「軽み」の具体的な説明をした所で、「物に滞らずさら／＼と流れて行くさまが、軽みの重要な本質に比せられる」。「ひばり」が「白砂の上を浅くさらさら走り流れる小川のやうに清冽なもの」というのも、その序文の一節に拠る。また「俳諧の軽みと絵画の軽」(初出「軽み」について)、「国語文化」昭一七・八、『風雅の道』七丈書院、昭一八・八で改題)で、頼原が次のように説いた所も、ひばりの(かるみ)の境地と近似する。

軽みは単に概念として語られたものではない。芭蕉の血のにじみ出るやうな体験を経て、おのづからそこに至り著いたものである。(略)芭蕉の軽みが後人に正しい理解を与へ得ないで終つたのは、思ふに「軽み」といふ言葉の感じが、軽浮、軽浅、軽薄等の連想を伴ひ易いことによつたのではあるまいか。(略)芭蕉の軽みは流行の変に應ずるものとして最も深い意義をもつ。その為には新しい現実に対する私の心境に、一毫の私意をも止めない不断の努力が要求される。(『風雅の道』)

この箇所から、前の引用部分でも、「かるみ」の心境として「くるしく努力して汗を出し切つた後」、「世界の大混乱の末の窮迫の空気が生れ出た」ものと説明されているのだろう。頼原は「芭蕉の軽みは、最も通俗なものの中に最も高貴な美を見出す」「高悟帰俗の心境を語るもの」(「俳諧の軽みと絵画の軽」前出)とするが、それは高潔でありながら民衆の中に根を下ろすものを求める志向に繋がる。この「高悟帰俗」の(かるみ)を体现する民衆詩人として、ひばりは花宵^{ハナヨイ}越後獅子を見ていたのではないか。

「越後獅子」という綽名自体、一般庶民に親しみやすい古典芸能に由来するもので、新潟の郷土芸能を題材とし、江戸期に長唄宗家・九代目杵屋六左衛門と作詞者・篠田金治によって創作された長唄の一つである^七。その綽名が付いたのも越後獅子当人に庶民的な所があるからだが、その綽名が(帰俗)の志向を表すものなら、「花宵」の筆名はシラー風の(高貴な美)の志向を併せ持つ詩人の(かるみ)Ⅱ(高悟帰俗)を表している。

そこで留意したいのは、太宰が眼を通していたケール^{ケール}の「心霊の指導者シラー」では、「我等を平俗か

ら引き離すことによつて、我等の本質の核心に附着せる鐵屎を除去し、さうして光の子として又神の肖像としての我等が本来属する所の純なる元素（境地）に我等を復らしめる」「心霊の指導者」（『現代日本文学全集 第五七卷』改造社、昭六・二二）としてシラーを捉えていたことである。このシラー論によれば、「美的宗教」としてキリスト教を信仰したシラーは、脱俗によつて人間の本質に帰ろうとする志向を持っており、彼の芸術的境地も、俗を排し人間を美的な神性に戻らせることにあつた。が、ひばりの〈かみ〉^{カミ} 〓 〈高悟婦俗〉は、それとは逆の志向を持ち、民衆の生活、即ち俗の中に身を置きながら「気高く澄ん」だ芸術 〓 高潔な美を希求するものだった。だから、越後獅子が、キリストや天皇（〓 高貴性）と結びつけた形で民衆（〓 俗）の声を反映した自由思想を説いた時、ひばりは「巷間無名の民衆たち」の一人として肯定的に捉えていたし、そこに〈高悟婦俗〉の志向も底流している。そうした志向に太宰の芸術意識も反映されていよう^ハ。そういう点から見るなら、シラーの戯曲を〈かみ〉の境地、〈高悟婦俗〉によつて読みかえたものが、大月花宵の詩「オ

ルレアンルレアンの少女」だつたのではないか。

このように、越後獅子 〓 詩人・花宵の志向とひばりの〈かみ〉の希求は連繋するものであつたのだが、〈かみ〉自体、「新しい現実に対する私の心境」（頼原「俳諧の軽みと絵画の軽」前出）であつて、帰着点ではない。太宰はこの小説を書くことで、敗戦後の激動、変化の中で生きる人々にエールを送ろうとし、彼自身も、民衆の心情、心性を反映する形で、新しい時代の倫理を見出そうとしたのだと考える。

一 ひばりのモデルとされる木村庄助は、昭和一六年八月一日に結核療養所「孔舎衛健康道場」に入所し、そこでの生活を日誌に記していた。逝去後、当人の遺志により太宰にその日誌が贈られた。その一部は木村重信編『木村庄助日誌——太宰治『パンドラの匣』の底本』（編集工房ノア、平一七・二二）にまとめられている。

二 昭和二二年六月、双英書房から出版された再刊本では、越後獅子の天皇に関わる発言など、G

HQの検閲で削除、改変された所がある。本稿では初刊本の河北新報社版を底本とする『太宰治全集9』（筑摩書房、平一〇・一二）を参照した（他の太宰の著作も筑摩書房版の全集を参照）。

三 同公演の広告記事は、朝日新聞や読売新聞等に掲載され、「読売報知」昭和一八年五月一六日の広告には「殉国の乙女ジャン・ダークの悲劇的生涯！」と記されている。

四 昭和一〇年九月二二日付の三浦正次宛書簡には、「『文芸春秋』に「ダス・ゲマイネ」なる小説発表いたしました。これは、「卑俗」の勝利を書いたつもり」と記されている。

五 太宰は『現代日本文学全集 第五七卷』（改造社、昭六・一二）に収録されたケーベルの「心霊の指導者シルラー」（久保勉訳）を参照している。

六 桂英澄の『わが師 太宰治に捧ぐ』（清流出版、平二一・八）によれば、昭和一七年の夏、箱根のホテルに滞在した時、太宰は芭蕉の「軽み」について触れ、「新しい芸術の進む方向は、この軽みだ」と語っていたというから、頼原の芭蕉論

もこの頃に目を通していたと考えられる。住吉直子「太宰治の「かるみ」材源考」（『叙説』奈良女子大学、平一三・一二）も、頼原の『風雅の道』の影響について指摘する。

七 浅川玉兔『長唄名曲要説』（日本音楽社、昭五八・六）参照。

八 太宰は「竹青」（『文芸』昭二〇・四）でも、「人間は一生、人間の愛憎の中で苦しまなければならぬもので」、「学問も結構ですが、やたらに脱俗を衒ふのは卑怯です。もつと、むきになつて、この俗世間を愛惜し、愁殺し、一生そこに没頭してみて下さい。神は、そのやうな人間の姿を一ばん愛してゐます。」と書いており、「脱俗」を批判し（俗）の中に生きる人間の中に神の愛||高貴な精神性を見ようとしている。